

八月十六日

佐賀ワークショップ二日目

第一講難波和彦第二講石山、難波箱の家と石山自邸。初日の鈴木博之との組合わせと、難波和彦との組合わせのトライアングルは良かった。午後三時第一課題講評会。百名の学生を全部把握するのは至難だが、これをしなければワークショップの意味はない。批評をしている時の学生社会人の顔の輝きや、眼の色を見れば大体その人間の人格はわかるようになった。要するに五回のW・Bワークショップ通算八回目の催事を介してわかったのは、建築設計の優劣、能力を問うよりも、人間そのモノの、敢えて言えば人格品性そのものを設計を介して二週間にあたり問うていたということだ。もちろんこちらも問われている。普通の大学教育ではそれができていない。大学はすでに教育という事を深く考えれば崩壊している。教師で喰っているだけの人間はそれを知らぬ。この三年間の経験は私にとっても大事だ。参加してくれた教師達も皆ワークショップの行末を危惧しているだろう。このスクールは何とか続けなければならぬ。続けるためにしなければならぬ事を考える。この問題に直面するのが八月の私の課題だ。世田谷村の課題でもある。結論はもう本能的には知っているのだが、それを実行するか否かは私自身のライフスタイルにも関わってくるから、簡単には決められない。夜十一時講評会修了。

八月十七日

佐賀ワークショップ三日目。今日は森正洋先生のレクチャーのみ。少しのんびりできる日だ。第二課題の出題に関しては新しいシステムをとろうと思う。少くとも五回生は個別の課題を作るべきだろうし、これからのリアルな生き方の相談にも乗らなくてはいいけない。三回生以上の人間の個別相談日としよう。

八月十八日

佐賀ワークショップ四日目

午前中第一講東大の松村秀一の住宅論。都市住宅の規定から始まり産業構造の近未来を示した。郊外住宅がいはゆる日本の住宅像の典型でそれはすでにマーケットとして飽和状態だ。その認識を前提にして論が展開された。イームズでの仕事に関するイメージは私にも大変参考になった。

第二講はオレゴン大学ケビン・ニュートの講義。フランクロイドライトの日本建築に対する直観からスタートして場所と建築の関係を様々に示した。日本ではこのような日本建築論を示せる人はいない。イギリス生まれの日本学が今、オレゴンにいる。

午後はシンポジウム。松村・ニュート両先生は東京とオレゴンに帰った。このワークショップの講義の質は建築関連のものとしては日本最高のものだろう。isの連載はとうとう穴を開けてしまった。でもどうしても書く時間をとれなかった。六時間あれば書けたのに、その六時間が作れなかった。山内さんには本当に申し訳ない。ゴメンなさい。ゴメンですむことじゃないのだろうが、不可能だった。どこかで二回分書いて送るしかないな。オレゴンのチャリー・ブラウンにも不義理をした。東京に戻ったら約束をはたそう。もしかしたら、能力を超えたことをしているのかも知れない。たぶん、そうなのだろう。こちらの態勢を立て直さなくてはならぬ。

八月十九日 日曜日

休み。ホテルでゴロ寝。色々と考えよう。疲れがズツと回復していかないような気がする。中原大学の黄先生来校。夕食を共にする。

八月二〇日

朝五時に目覚める。台風が接近しているらしいが、その気配はまだ無い。

新聞にギリシャ政府が英国にエルギン・マーブルの返還を正式に求めたとの記事があった。アテネオリンピックの大きな目玉としてギリシャが提起した大問題だが、これは博物館の王としての大英博物館の屋台骨を揺るがしかねない問題になるだろう。アクロポリスの丘のパルテノン神殿は建築の王として依然君臨し続けているが、それはヨーロッパ史が世界史であるという前提があるからで、建築史の王としての意味しかない。王はすでにミイラになっっている。そのミイラがエルギン・マーブルによって歩き出したのだ。エルギン郷がこの古代彫刻をパルテノンから持ち出したのは一七九九年のことだから約二百年前の出来事だ。紀元前五世紀のパルテノンの部品が二千年の時間の流れの中で二百年前に事故にあっただけだ。

ギリシャ政府もオリンピックを機に考え抜いた事だから、イギリスは何らかの対応を迫られるに違いない。この問題は近代的な博物館という制度そのものの大矛盾の本質を一気についていて興味深い。

二十一世紀の初頭、このような民族国家間の文化的紛争が噴出するのではないか。台湾の故宮博物館の収蔵品も当然中国は返還を要求するだろうし、日本の博物館にも様々な朝鮮半島の出土品

があるだろう。全部火種になる可能性がある。

#### 住宅設計について

住宅設計を本格的に再開する。設計をするだけではもう面白くない。住宅作りを依頼主と共にするやり方を確立する。

例えば、子供部屋の壁貼りくらいは依頼主の子供達にやってみよう。オヤジのコーナーは大工さんと一緒にオヤジがやる。台所まわりはお母さんも参加する。庭は一家でガーデニングする。

世田谷村の実験を介して理解できたのは、住宅という環境の非商品性の問題であった。非商品性とは未完である状態であり、それはそのまま変更可能であることにつながる。住宅は人間の生活と共に変化してゆく。あらゆる住宅は変化する。いわゆる竣工時は、始まりに過ぎない。住宅設計を完成品を作ることを目標としない。施主のライフスタイルの変化と共にある、そんな状態を設計にとり込む。そして、その状態を設計製作する。セルフビルドの概念をより安易で慣れやすいものにする。インテリアは誰にでもできる世界なのだから、そういう風に関放してゆく。週休二日はすでに確立している。人間は一般的に手持ちの時間の三分の一はすでに自分だけの時間として所有している。その三分の一の時間を一ヶ月、あるいは二ヶ月家作りに使用してくれたら良いのだ。それでコストは又大幅に落ちるだろう。床を含めた骨組み、その表皮、外壁のこと、そして設備。これはプロに任せる。内装の一部に施主の手を借りる方法を一般化する。私のホームページを介してコンタクトしてくれる人々が少しずつ出現してきた。この人たちは新しい人種だ。ある意味では情報を自主的に取捨選択できる人々でもある。私が今、九州佐賀のホテルで早期、書いてあるこの言葉がアツという間に多くの人に伝わっている。このリアリティは生かさなくてはならない。

人間の一生の中で、要するに家作りにいか程の時間を賭ける意味があるかの、これは問題なのだ。金がある人は金をかければ良い。金を充分に持たぬ人は時間をかければ良い。家を作ることにどれ程の価値を見出すかということではないか。

家作り、つまり人間主体の環境づくりの問題は遺伝子改変による人体改造の問題や、クローンの問題、生命工学が抱え込む問題と同じに重大で基本的な人類の問題だと思っただけだ。

大学で教育を受ける時間の何がしかは、オヤジの家作りを手伝う。それが一生の生きる形式の中に組み込まれている。そんなのが理想かな。ともあれ、具体化してホームページにプレゼンテーションしてみよう。

杉並の渡辺さんの家作りがこんなやり方の第一号になってくれれば良いのだが。

という訳で渡辺さんに連絡して九月に入って打合わせという事にする。